聖徳大学短期大学部

発行　聖徳大学短期大学部
総合文化学科
住所　〒271-8555 千葉県松戸市岩瀬550
TEL　047-365-1111（大代表）
https://faculty.seitoku.ac.jp/arts-sciences/

BISOCIE

Become Independent in Society（社会的自立）

2021年1月25日　NO.13—H—I
グループ名
南房総絵本グループ
主な内容
南総昔話・民話の絵本制作

南房総市の昔話・民話の絵本制作

南房総市の子どもたちの郷土への関心や郷土愛の向上を促し、地域活性化に貢献していくことを目的として、**昔話や民話の絵本化**を企画しました。

南房総市との交流は平成29年度から始まり、平成29年度は7冊、平成30年度は8冊、令和元年度は9冊の絵本を制作しました。

現地での報告会は、平成29年度と平成30年度に実施し、制作した絵本による読み聞かせは平成30年度に実施しました。

絵本は、毎年、南房総市内の小学校や幼稚園・保育園などに寄贈しています。

さらに、**一人でも多くのかたに、南房総市の昔話・民話を知ってもらいたい**と考え、松戸市の岩瀬文化祭や聖徳祭でも絵本を展示、配布しています。

平成29年度～令和元年度に刊行した絵本　24冊！

1　天狗と仲良くなった男
2　鶴姫の観音
3　うみぼうず
4　竜の目
5　真間の古狐
6　豆腐が飛んだ
7　沓見のバア淵
8　式部の合わせ鏡
9　竜王の子の約束
10　栗御飯
11　芋井戸
12　白い猪
13　鐘ヶ淵の鯉
14　狸が漁師を起こす
15　風呂屋の客
16　馬に銭を分ける
17　白蛇の恩返し
18　サザエの壺焼き
19　侭狐に化かされた魚屋
20　どっこいしょ
21　生き馬の目
22　勘解由どんの猫
23　鬼子母神
24　蛇岩

制作した絵本の数々

絵本制作の手順

①　絵本にしたい昔話を選ぶ
②　絵本の総ページ数や構成を決める
③　文章を考える
④　絵を描く
⑤　解説をつける
⑥　奥付や表紙・裏表紙を整えて完成

最初に、絵本にしたい昔話を選びますが（①）、南房総市在住の昔話研究家、生稲謹爾氏の著作『南房総市の昔話　第1集』（二〇一六年、NPO法人富浦エコミューゼ研究会）や、南房総市のHP「市にまつわる民話」を参考にしました。

表紙、裏表紙を含めて8ページに収まるように、構成を考えました（②）。

昔話の文章は、原話の雰囲気を変えずに、子どもにもわかりやすい表現を心がけ、読みやすいように漢字にフリガナを振りました（③）。

時代考証をした上で、絵を描き（④）、パソコンなどで編集を行います。手描きの絵に色鉛筆やクレヨン、ペンで色をつけたり、スマホやパソコンのアプリを使って色を塗ったりするので、作品によって風合いが異なり、描いた人の個性や美意識が感じられる作品に仕上がっています。

最後に解説（⑤）や奥付（⑥）をつけて完成となります。解説では主に、言葉の意味や物語の時代背景、類似した昔話などを紹介しています。

令和2年度に制作した絵本

25　子の姫
26　枇杷落し哀話
27　大太法師
28　茶釜の尻を叩く
29　おおさの根の主
30　馬がかわいそう
31　雀を追っ払う
32　毛林寺の大蛇

生稲謹爾氏の著書

今年度の活動内容

絵本8冊は、二〇二一年一月末に刊行予定です。

絵本制作以外には、岩瀬文化祭（二〇二〇年十一月十九～二十三日）で、これまで制作した絵本の展示を行いました。

岩瀬文化祭では、会館の入り口で来場者の検温、記帳へのお願い、会場での案内や、アルコール消毒の呼びかけ、展示品の説明、岩瀬住吉公園の清掃なども行いました。

文化祭の来場者には、絵本の説明をしたり、絵本に出てくるキャラクターのステッカーを配ったりしました。また、どの絵本に関心が集まったかを知るために、投票形式でアンケートを取らせていただいたりしました。

アンケートは、展示している絵本のタイトルが記載されている用紙の横にシールを貼るという、子供たちも行いやすい形を考えました。

↑岩瀬文化祭で展示した絵本

↓絵本の説明をする学生

今後の展開

・完成した絵本は、南房総市内の幼稚園・保育所・小学校などへ贈呈する。
・来年の聖徳祭で絵本を展示する。
・後輩に引き継ぎ、二度目の読み聞かせも実施したい。
・岩瀬さくら祭りでも、絵本の読み聞かせを実施したい。
・絵本に関するクイズも作ってみたい。

今年度制作した絵本のあらすじ紹介

25　子の姫

（山本茉奈）

鎌倉時代、和田の浜辺に一隻の舟が打ち上げられる。舟には、子の姫が黄色い花を握ったまま倒れていた。村人が、姫を村へ連れて行き看護すると、姫は元気になり村人に文字や歌を教え仲良く暮らすが、やがて姫は亡くなってしまう。村人は社（やしろ）を建て姫の霊を祀った。

庭に植えた花木は大きく育ち、村人が分け合い植えた花木も村全体を黄色く染め、この地を「木花」（ぼっけ）、この村を姫が花園天皇の皇女だったことから「花園」（はなぞの）と呼ぶようになったという話。

26　枇杷落し哀話

（田口星・林姫夏・福島夕夏・吉野睦美）

昔、岩井の小浦の海に沿った崖道に、疲れた様子の老父とその娘が座り込んでいた。

一人の農婦がその父娘を憐れみ、枇杷をいくつか娘の前かけに入れてあげた。父娘は大喜びで、枇杷を食べようとしたが、枇杷は娘の手から崖のほうに転げ落ち、それを取ろうとした父娘は、突然の強風にあおられ、崖から転げ落ちてしまう。

翌朝、崖下には、枇杷をしっかり握った娘と父が見つかった。

27　大太法師

（篠塚美紅）

昔、大太法師（だいだあほうし）という巨人が、上総のほうから安房に向かって歩いてきた。

大太法師は岩井の浜辺に行き、三キロ離れた富山（とみさん）を枕にして、二十一日間も眠り続ける。

村人たちは、大太法師の足裏についた砂を落とし始めたが、くすぐったくなった大太法師は目が覚め、起き上がると、雲にまで届く背の高さであった。

28　茶釜の尻を叩く

（熊谷侑子）

昔、丸村のあるところに頭の少し弱いお婿さんがいた。

そのお婿さんがある日、用事があって実家に行ったが、帰るとき父親が、大きな黒牛を一頭くれた。

婿は貰った牛をつれて家路についたのだが、牛は草を食べながら、だんだん婿から離れて、山の方へ行ってしまった。

そのことを奥さんに話すと、今度、牛をもらったら、縄で縛って引いてくるとよいという助言を受けた。

しばらくして、婿が再び実家に行くと、今度は母親が茶釜をくれた。

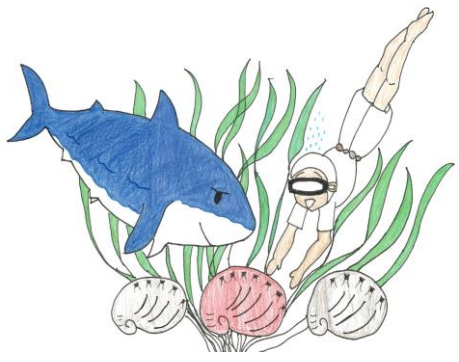
そこで、婿は茶釜を縄で縛り、引き始めた。

29　おおさの根の主

（峰岸えみり）

原の海の沖に「おおさ」と呼ばれる白浜では、一番大きい根がある。おおさの根には「おおさの根の主」である鮫がいた。その鮫の体はこぶだらけで牡蠣などがいっぱい付き、岩のように見えるので、海女が潜ってもどこにいるのか分からなくなる。

おおさの根の主（鮫）は、海女に鮑のありかや嵐がくるのを教えてくれるが、海女が主に触れても謝らないと、がぶりとのみ込んでしまう。



30　馬がかわいそう

（黒川衣里佳・小島菜月・加納裕紀子・徳嶋美優）

昔、九兵衛という男がいた。あるとき那古の街に出かけ、薪を売ったお金で石臼を買った。

馬がかわいそうだと思い、石臼を自分が背負ったが、あまりの重たさに石臼を背負ったまま馬に乗り、家に帰るのだった……。

31　雀を追っ払う

（菅野明日美）

昔、村人たちは雀が田んぼの稲を荒らすので、大変困っていた。そこで名主が村人達を集め、雀を追っ払う相談し、村一番の大男で声の大きい長太に白羽の矢が立った。

早速、長太は言われたとおりに雀を追っ払い出すが、大声だけでなく大きな足で田んぼに入り、稲をめちゃくちゃに踏み潰すので、皆びっくりしてしまった……。

32　毛林寺の大蛇

（丸林優・宮城花音・竹内麻依）

昔、平磯の山奥に毛林寺というところがあり、そこに住む大きな蛇に、きこりの兄弟の兄が蛇に飲まれてしまう。そこで、弟が、兄の仕返しをする話。

絵本制作で工夫した点

- キャラクターをなるべく簡単に、少し可愛く描いた。
- 特に伝えたい内容の部分を絵に描いた。
- 人物の表情や動作などに力を入れた。
- 時代に合った衣服・乗り物・建物・話し言葉に気をつけて描いた。
- 色鉛筆で描いたので、塗りつぶすところは線からはみ出ないように塗った。
- 子供たちにもわかりやすい言葉に変えた。

感想

- 絵本制作やグループワークを通じて、集中力や協調性が身についた。
- 自分が作成した絵本で、少しでも南房総市と繋がれることは、とてもうれしい。
- 一つの作品を最後まで頑張ったことで、自信につながった。
- この活動を通して、絵本への興味がますます深まった。

【編集後記】

新聞作りでは、文章と絵の配置の作業が大変だったが、きちんとまとめることができた。

（菅野・峰岸・篠塚）